

實業
新日本讀本

卷七

教科書文庫
4
810
44-1914
2000054286

43331

教科書文庫

4
810
44-1914
20000 54286

Kodak Gray Scale



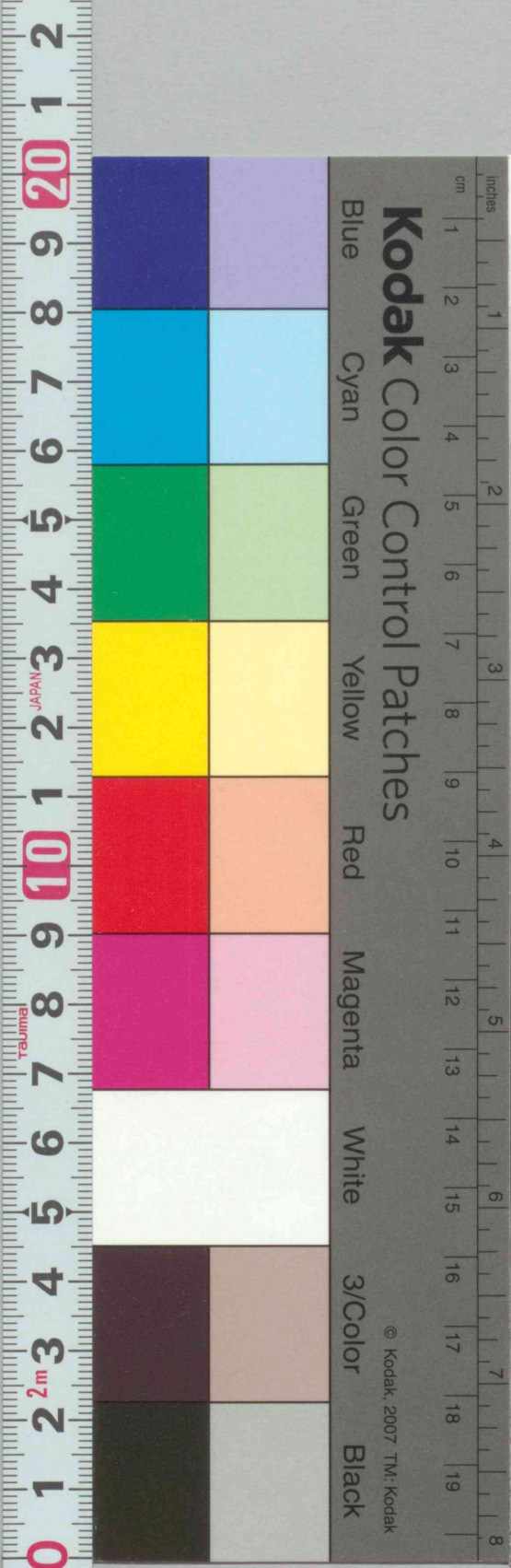
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





業實
新日本讀本卷七

目次

一	國語と國家	一
二	雑木林	六
三	春の山風	九
四	高德題櫻樹	三
五	品性	四
六	農學ノ先哲ヲ祭ル	九
七	世界の無線電信の著者に贈る	三
八	論語五章	九

目次

375.9
Roll



六盟館編輯所編纂

業實
新日本讀本

東京

會社
六盟館



九	鎮守の森	三〇
一〇	法律格言	三三
一一	樂地	三六
一二	武士道	四〇
一三	管鮑之交	四七
一四	漢詩二篇	四九
一五	報知謝絶	四九
一六	山の美	五二
一七	銷夏日記	五九
一八	畫虎類狗	六四
一九	揚子江溯航	六五

二〇	朝見の盛儀	七二
二一	君臣相遇	七六
二二	富士の高根 (一)	七六
二三	富士の高根 (二)	八五
二四	報徳教	九三
二五	自治體の模範	九四
二六	一生の覺悟	一〇三

卷七目次終

實業 新日本讀本 卷七

一 國語と國家

凡そ一人民が話す言語と其の人民の性質との間には、最も入組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ、あるひは考ふるすべての事は、皆その言語に反射し出づるなり。故に「言語はその話す人の精神の上に生活する思想及び感情が、外に出てて化身したるものなり」と言ふも、決して不可なきなり。

試みに支那語を見よ。いかに仁義の道が彼等の間に行は

れしかは、歴史を待たずして言語の上に明かなり。文人國に詩歌の語發達し、武人國に武人の語おほく繁昌す。英語の商業に於ける、佛語の社交に於ける獨逸語の學問に於ける、皆其の國民の長所によりて發達したるものなり。

國語は之を話す國民に取りては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を日本語に譬ふれば、日本語は日本人の精神的血液なりと謂つべし。日本の國體は、この精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種は、この最も強き最も永く保存せらるべき連鎖の爲に散亂せざるなり。故に國難の一度來るや、この聲の響く限りは、五百萬の同胞は何時にても均しく耳を傾く

永長

るなり。何處までも赴いて、飽くまでも互に助くるなり。死ぬるまでも國に盡すなり。而して一朝慶報に接するときは、樺太のはても臺灣のはても、一齊に君が八千代を壽ぎ奉るなり。

標幟

かくの如く言語は國體の標幟となるのみならず、これと同時にまた一種の教育者、いはゆる情深き母にてもあるなり。われくが生まるゝやいなや、この母はわれくを膝の上に乗へ取り、懇に此の國民的思考力と此の國民的感動力とを教へ込みくるゝなり。されば、この母の慈悲は誠に天日の如し。苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。

言語の上には、われ〜が心中に一日も忘れかぬる生活、ことに人生の神代ともいひつべき、小兒の頃の記念が結びつき居るものと知るべし。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果て、すやく〜と眠に就かんとせし折、我等の母上は、いかに優しき聲にて寝よとの歌を謳ひ給ひしか、頑是なき子供心にたはむれなどして打廻りし時、我等の父上は、いかに嚴かに教訓を垂れ給ひしか、さては林に入りて栗の實を拾ふに餘念なく、或は春のうらゝかなる野邊に、友達と共に、蓮華草など摘みあるきたる當時より使ひ來れることばは、當時の人名、當時の地名と共に、何とも云はれぬ快感を我等に與ふるなり。續いては小學校のことば、長じては學生のこと

ば、市民としてのことば、或は職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それぞれの生活をこの上に反映す。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて、外國語の教育のみを受けたる人ならざるかぎりは、この國語の恩澤を蒙り、この國語に感謝の意を表せざるものはなかるべし。

尊貴
力務勉
されば國民が其の國語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、決してこれをおきて他の外國語を尊重せず。情の上より自國語を愛し、理論の上よりその保護、改良に従事し、以て眞正の國民を養成せんことを務む、現今の獨逸の如きはその好例なり。

およそいづれの國を問はず、いやくも國家の觀念の上

より、その一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て、教育の目的とする以上は、常に先づ其の國の言語、次に其の國の歴史、この二つを蔑にしては、決してその功を收むること能はず。これ國民たるもの、須臾も忘るべからざることなり。

(上田萬年 國語のため)

文法

主語 母は我々を膝の上に迎へ

(文の主要成分)

二 雜木林

東京の西郊多摩の流に至るまでの間には、幾箇の丘あり、谷あり、幾條の往還はこの谷に下り、この丘に上り、うねくとして行く。谷は田にして概ね小川の流あり。流には稀に水

車あり。丘は拓かれて畑となれるが多きも、其處此處には角

に劃られたる多くの雜木林ありて残り。

余はこの雜木林を愛す。

木は檜・樺・榛・栗・櫨など猶多かるべし。大木稀にして多くは切株より簇生せる若木なり。下ばえは大抵綺麗



挺然

に拂ひあり。稀に赤松・黒松の挺然として、林より秀でて翠蓋を碧空に翳すあり。

霜落ちて大根ひく頃は、一林の黄葉錦してまた楓林を羨

簇々

まずその葉落ち盡して寒林の千萬枝簇々として寒空を刺すも可。日落ちて煙地に満ち、林の上薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる最も可。

春來りて淡綠・淡紅・淡紫・嫩黃など、和かなる色の限りを盡して新芽の萌ゆる時は、何ぞ獨り櫻花にのみ狂せんや。

假睡

若葉の頃その林中に入りて見よ。葉ごとに日を帯びて、綠玉・碧玉頭上に蓋を綴れば、吾が面も青く、假睡せば夢もまた綠ならん。

作造

初茸の時候には、林を綠どる萩・薄穂に出で、女郎花・刈萱林中に亂れて、自然はこゝに七草の園を作れり。

月あるも可、月なきもまた可、風露の夜これらの林のほと

りを過ぎよ。松蟲・鈴蟲・蟬・蟲・きりぎりす、蟲と云ふ蟲の音雨の如く流るゝを聞かん。自ら蟲籠となれるも妙なり。(總宮萱花)

練習

左の文の解釋をなせ。

松樹挺然として翠蓋を碧空に翳す

一林の黄葉錦してまた楓林を羨まず

寒林の千萬枝簇々として寒空を刺す

三 春の山風

百首歌奉りしとき

藤原家隆朝臣

谷川のうちいぼる波も聲急てつ
うぐひすを驚へ春はやはらけ

不明不暗朧々月といへることを 大江千里

てををたゞ曇りもえては春乃夜の

ればぬ月夜は去くものぞかき。

山里にまかりてよみ侍りける 能因法師

山里の春の夕ぞ来て見れば

よもほひの鐘は花ぞちりける。

五十首歌奉りし中に湖上の花を 宮内卿

花さそふ比良の山風吹たはる

あき行く船のほと見ゆるはで。

晚霞といふことをよめる 後徳大寺左大臣

なおの海乃霞のまよながむれぐ

入日をほらぬ沖つ去らなみ。

題しらす 藤原雅經

移る行く雲はほらしの聲すな

あるかまさ紫のうつらむの山。

守覺法親王家に五十首歌よませ侍りけるに 皇太后大夫俊成

立ちあまたも来て見ん松島や

を志はの空まや波にほらす。

東の方にまかりける時よみ侍りける 西行法師
年多けてはたふゆべ志を思ひ死や
命なまけりまやのなかやは。

百首歌よみ侍りけるに

藤原定家朝臣

見よ多勢ば花も紅葉もあまけり
浦乃やほやの河元のゆふぐさ。

(新古今集)

四 高德題櫻樹

兒島氏、本三宅氏。世居備前兒島。兒島範長者爲備後守。子高

德稱備後三郎。帝之在笠置也。範長高德欲赴援。聞笠置陷。楠氏
敗乃止。

已而聞帝西遷。高德謂其衆曰。吾聞志士仁人有殺身以爲仁。
見義不爲無勇也。蓋要奪駕以舉義。衆奮從之。伏舟阪山而待。

閑道 悵恨

久之不至。遣人候之。曰。駕向山陰道。乃閑道至杉阪。則已過矣。
衆乃散去。高德悵恨不能去。乃變服尾駕而行。數日。欲一見帝。有
所言而不得聞。

於是夜入帝館。白櫻樹而書之。曰。天莫空勾踐時。非無范蠡。且
日護兵聚視不能讀也。乃奏之。帝熟視之。欣然。心知有勤王者也。
帝至隱岐。居國府島。高時遙令隱岐守護佐々木清高將兵監護
焉。又流藤房以下公卿六人。殺藤原俊基等四人。

藤原資朝在、佐渡、其子國光、自京師赴省、父已爲本間三郎者所殺、國光夜斬三郎而去、高時遂流皇子尊良、宗良、恆良、殺恆良、獨第三子兵部卿護良、逃奔吉野、於是四方無復勤王之師矣。

(類聚 日本外史)

五 品 性

拱手
願使

人の尊卑は何によりて之を判つべきか、かの飽食暖衣、大厦高樓の内に住み、世間生活の辛苦を知らざるもの尊くして、弊衣粗食、草屋茅舎の内に、わづかに雨露を凌ぐもの卑しきか、かの財力あり、才能ありて人の上に立ち、おのれは拱手して數多の人を願使するもの尊くして、人に使役せられ日

營々

夕營々として労働するもの卑しきか、世或は然りと答へん。我等はその必しも然らざるをいはんと欲す。

いづれの職業を問はず、完全無缺にこれを行はんことは、尋常一様の才能にては難かるべけれど、ただ一とほりこれを行ふには、さまで素養と才能とを要せざる職業もあり。中には、ただ一とほり、これを行ふにも頗る素養と才能とを要するもあり。然れども、前者に従事するものを直ちに卑しとなし、後者を直ちに尊しとなさんは、これ亦われ等の意を得たるものにあらず。

卑賤

生活の程度も職業の種類も、人の尊卑を定むる標準となすこと能はず。われ等は畢竟何を以て人の尊卑を定むるぞ

品 性

といふに、その標準は他ならず。その人の心事の高潔なると卑劣なるとの差にあり。即ち品性の如何にあり。世間財力あるもの、其の財力を働かせて事業をなすに、彼等は真正に國家の發達を助成すべき意思ありて之をなすか、抑また口に美辭を列ぬれども、其の心は私利一點の外にあらざるか。かの才能あるもの、其の能を抱きて要路に立つに當りて、彼等は、其の地位によりて、真正に國家の發達を怠るなきか、抑またその地位を利用して竊に私利をはかるに違なきか。

滔々
覆掩蔽

つらく、滔々たる天下の大勢を察するに、その後者に屬するもの多く威勢を有し、社會に濶歩し、清廉の士は其の煩瑣なるに堪へず、目を閉ぢ耳を掩うて、見ることなく聞くこ

跋扈

となからんと欲するが如し。これ何の故ぞ。他なし。社會は人の尊卑を定むべき標準を誤れるによれり。即ち社會は人の外觀とその地位とを見て、その品性の如何を問はず。品性下劣なれども、外觀の壯大にして勢力ある地位に據れるものは、世間は直ちにその人を見て尊しとなす。かくの如くにして、これ等の輩が、ますく社會に跋扈するに至るは自然の勢なり。

前途有望なる諸子は、この忌むべく悲むべき天下の大勢を趁うて走るべからず。諸子が將來社會に出でん日、その執るべき職業は種々なるべし。その立つべき地位はまた種々なるべし。然れども、その職業とその地位との如何を問はず、

品性

濁濁

刮目

*米國の豪商

その心事は必ず高潔ならざるべからず。その行爲は必ず清廉ならざるべからず。諸子が自ら期することかくの如くにして、然して人の尊卑を品評するには、常に標準をその人の品性如何に採らば、卑劣なるもの、汚濁なるものは、おのづから社會の制裁を受けて其の勢力を失墜し、高潔なるもの、正大なるものは、おのづから勢力を得て、天下の風潮はこゝに一變し、濁濁の空氣こゝに一洗せらるゝに至らん。

よくかくの如くならんか、國家の發達は必ず刮目して見るべきものあらん。アモスローレンス曰く、人に必要なものは富にあらずして品性なり。縱令、全世界を手にすとも其の品性を缺かば何かせんと、まことに然り。

(嘉納治五郎)

練習一、左の語句の意義を問ふ。

おのれは拱手して人を顧使す

口に美辭を列ぬれども心は私利一點のみ

日夕營々として勞働に服す

二、卑賤 作造 力勉努 の區別を問ふ。

三、「とも」「ども」を用ひて二つの短文を作れ。

六 農學ノ先哲ヲ祭ル

維時、明治十五年五月十五日、大日本農會頭二品勳一等能久親王謹ンデ、貝原宮崎佐藤大藏、先哲ノ靈ニ告グ。

我が會員中、中村直三躬ヲ稼穡ニ從事スルコト、茲ニ數十年。古今ノ得失實驗セザルコトナク、苟モ世ヲ利シ物ヲ濟スルノ務アレバ、則チ勇進直行殆ド其ノ身ヲ忘ル。是ヲ以テ海内

貝原益軒
宮崎安貞
佐藤信淵
大藏永常
大和山邊郡
の老農

貝原益軒及自贊

名手狩野昌運爲予描像。欲其克肖。凡五易稿。而後淨寫如此。可謂鄭重不苟也。因自贊以遺來裔云。
樸陋之質。衰朽之軀。引鏡窺影。彷彿畫圖。玩古不倦。至老增娛。千慮有得。斯語庶乎。



甄拔

皆推シテ農師トナス。今茲三月、朝廷米麥共進會ヲ東京ニ開ク。直三首トシテ甄拔ヲ蒙リ、天顔ニ咫尺シ、特別名譽賞牌及ビ金圓ヲ賜ハル。直三ノ榮寔ニ極レリト謂フベシ。コ、ニ於テ自ラ謂ヘラク「吾ガ今日アルヲ致スハ皆先哲ノ賜ナリ。吾

報本反始

何ゾ與ランヤ」ト。懷舊ノ餘遂ニ本日ヲトシテ大ニ祭壇ヲ築キ、先哲ノ靈ヲ迎ヘ、以テ報本反始ノ義ヲ表ス。ソノ意洵ニ篤シ。方今人情日ニ漸ク輕薄、ソノ流ヲ汲ンデ而シテソノ源ヲ忘ル、者甚ダ多シ。即チコノ舉獨リ農事ヲ益スルノミナラズ、ソノ風教ヲ助クル亦大ナリ。

唯ミルニ本會講ズル所ノモノハ、大抵先哲ノ遺著ニ屬ス。然ラバ誰カ其ノ功德ニ浴セザルモノアラン。我が會員タルモノハ、誼宜シク趨リテ相共ニ籩豆ノ事ニ與ルベシ。

能久、因テ會員ニ代リ聊カ鄙衷ヲ告グ、尙クハ饗ケヨ。

【文法】

コ、ニ於テ(彼)自ラ謂ヘラク
海内皆(彼ヲ)推シテ農師トス

(主語ノ省略)

(客語ノ省略)

農學ノ先哲ヲ祭ル

二一

籩豆

饗受
承享

聊カ鄙衷ヲ(先哲ノ尊靈ニ)告グ

(補語ノ省略)

稼穡ニ從事スルコト茲ニ數十年ナリ

(述語ノ省略)

〔練習〕

次の語句を解釋せよ。

甄穡ヲ蒙リテ天顏ニ咫尺ス

其ノ流ヲ汲ンテ其ノ源ヲ忘ル

七 世界之無線電信の著者に贈る

「世界之無線電信」御稿本御送附に預り候處、時節柄にもあり、かつは御出版御急ぎの事と察し、緩々拜讀の餘暇を得ざるは遺憾の至に候へども、其處此處と拾ひ讀み致候ばかりにても、尠からざる興味を覺え申候。

電信の戦争に至大なる影響を及ぼし候事は、疾く人

木村駿吉の著

慇懃少

日露戦役

の知る所にこれあり、今回の戦役に於ても、大山元帥が、南滿洲一面に、蜘蛛の網の如く張りたる電信電話線をとほして、日夕諸方向よりの情報を得られ、數十萬の大軍を指揮して古今未曾有の大勝利を收め居られ候事は、誰も想像致し得る事と存じ候へども、東郷大將が海上において、目に睹ること能はざる電波を驅つて、數十隻の艦を手足の如くに指揮しをられ候事は、一寸世人の想像の及びがたき事かと存候。昨年數箇月の間旅順口封鎖の節などは、大將は大抵常に同地より數十哩の海面に居られたる事に候が、旅順港外に配置せられたる我が哨艦より、無線電信によりて日夕敵の情報を

艦

著者に贈る

受けられ候へば、端艇の港口出入に至るまで殆ど手に取る如くに承知せられ候のみならず、攻圍軍日々の通報の如きも、大連灣碇船の中繼船を経て、矢張電波の力により斷えず承知せられ、大將も之に應じまた電波を介して、それぞれ我が艦隊を指圖せられたる次第に有之候。かつ此の無線電信は、陸上電信線による通信の如くに、獨り發信者と受信者との間にのみ通じ候にてはこれなく、電信機械を備へ居り候各艦へ同時に知れ渡り候事なれば、各艦とも新聞號外の類を待たず、時々刻々新しく且活きたる情報を即座に承知し得る次第に候へば、長日月の間、困難なる封鎖勤務に於て、全軍に些

少の倦怠をも生ぜしめずして相濟みしは、主として無線電信の賜と相感じ申し候。他年若し當時各艦より發せる無線電信の一日分のみにても一讀致し候はば趣味津津たるを覺え申すべくと存じ候。而して我が海軍の無線電信をして右の如く有効ならしめたる事は、貴下多年御盡力の功多きに居る事と只管敬服致し居り候。惟ふに本邦に於ても、無線電信の事を研究せる人士尠からざるべしと存じ候へども、時局の必要に迫られ、専心一意學理と實驗とを併せて、貴下ほど十分に此の事を研究せる士は、恐らくはまた他にこれあるまじく、而して今其の人によりて斯學の好著述世に出て候事

期待

は、誠に科學界の幸福にして、定めて非常の歡迎を受けられ候はんと今より期待致し居り候。

殊に貴下が序文中に於て、この最も新しき科學の發明に係る巧緻の機械を、最も古くより傳來せる大和魂を以て、今はの際まで泰然として使用せし、軍艦吉野無線電信係下士卒の忠烈なる事蹟を紹介せられたる事は、最も會心の點に有之候。獨り小生が當時の事を回想して、亡友佐伯大佐も定めて地下に満足致し候はんと察し候のみならず、此の事蹟たるや、科學の進歩が決して我が大和魂に何等の障礙をも與ふるものにあらずる事を證明致し候ものにて、識者の舉つて感謝すべき

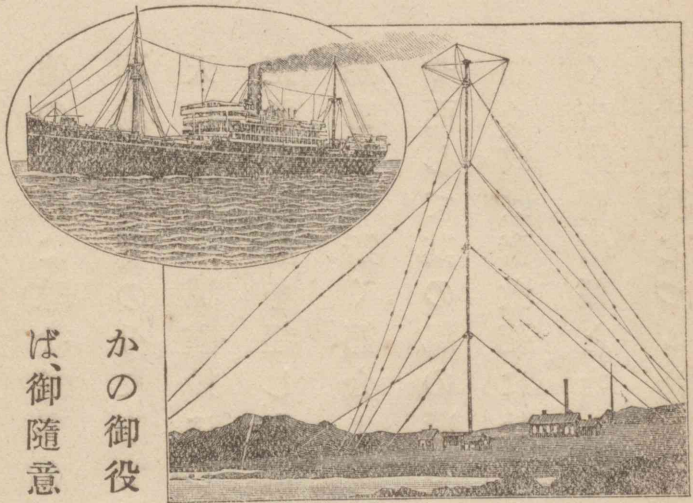
竹村兵曹小
山一等水兵

會心

吉野艦長
佐伯閣

事と存じ候。抑、小生共は日夜無線電信の恩澤に浴し居りながら、其の原理の如きは今に了解に苦しみ、却つて他の感想に馳せ候事も有之、開戦以來我が四千餘萬の同胞が、各、其の分に應じて義勇公に奉じつゝある至誠天に通じ、一種靈妙にして物質界の電波に對比すべき正氣の波動を起し、出征軍隊と後援國民との間に互に感應して、斯く都合よく戦局を進めつゝあるにあらずや。而して其の氣の凝るや、恰も電氣が雷電となれるが如く、或は奮激死に赴く決死隊となり、或は從容死に就く吉野電信係となり、壯烈鬼神を泣かしむる幾多忠勇の士を現じつゝあるにあらずや。などの感想を起し候

著者に贈る



事に有之候。

餘事はさておき、今は貴著の序文御求に預り候處、これは迎も小生のがらになき大役に御座候間、平に御斷り申上げ候。尤も此の俗文中に記載いたし候事柄にして、何等かの御役に相立ち候ものも有之候ならば、御隨意に使用下さるべく候。先づは他に先だちて貴著詳讀の光榮を得候事の御禮、且は昨年来度度の御懇書、殊に珍しき外國新聞の御惠贈に對し、

何等の御挨拶をも申上げざりし缺禮の御詫を兼ね、右申述べ候。

時下不順の候益、御自愛斯學の研究を重ねられ、遠からず貴著標題に二字を加へ「世界無比の無線電信」を我が海軍に貢獻せられん事切望の至に御座候。 敬具。

(島村速雄)

*島村將軍時に聯合艦隊第二戰隊司令官なりき

八 論語五章

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆、而親仁、行有餘力、則以學文。

曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校。

昔者吾友嘗從事於斯矣。

子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂。賢哉回也。

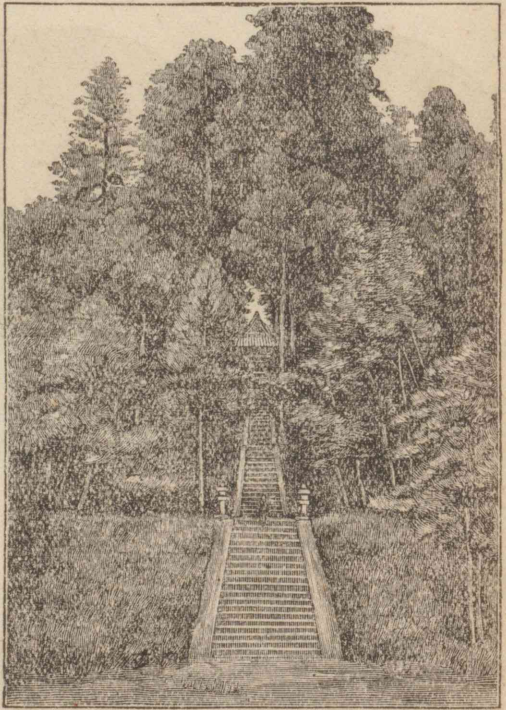
曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠。仁以為己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎。

子曰、君子有九思。視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義。

九 鎮守の森

蕭條

滿目蕭條として、田も畑も霜枯の風情見るかげもなき間に、一むら、こんもりとして緑鬱蒼たるものは、鎮守の森なり。



金も石も燦けんばかりなる夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩さらさらと鳴れば、こゝは子守・田夫等の安樂世界となりて、拜

瑞籬

殿に晝寢の夢圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿、紅を染めて夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松・杉の蔭暗くして瑞籬のほとり神さびたり。

鎮守の森

翻々

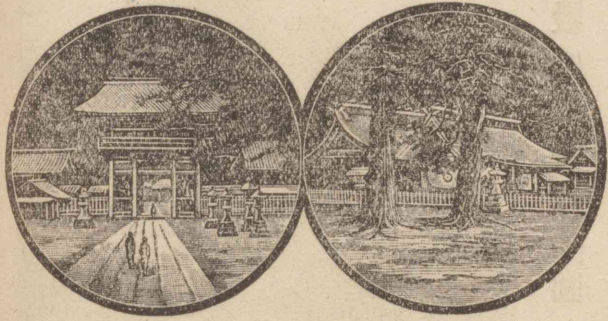
日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎮守の森は舞踏場と化するなり。祠頭の旗幟翻々として、風に靡く時、満村の老幼織るが如く、鎮守の祭禮は一歳中またと

香取神宮

得がたき歡樂たるなり。年豊なれば詣て謝し、天早なれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望を聚め、一郷の中心として、神聖なる、しかも面白き所たるなり。

鹿島神宮

祀祭



かゝる鎮守の森にいます神は、多くはその土地その土著の民と何等かの關係あり。遡つて之を考ふれば、氏族部民がその祖先を祀りたるもの少なからず。諸國

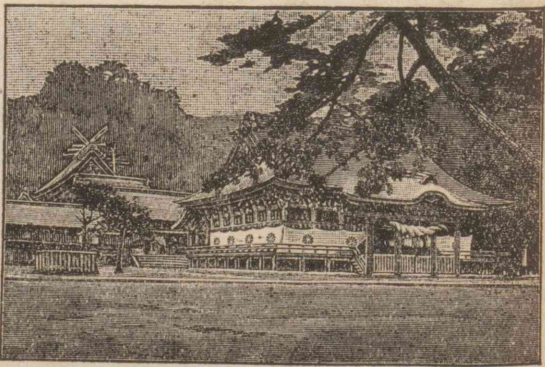
出雲大社の

伊勢神宮の

に鎮座したまふ神社は、畢竟鎮守の森の大なるものなり。鹿島・香取の神宮は、

經津主神・武甕槌神の子孫が創めたる所にして、宇都宮二荒

神社は、毛野君の一族がその祖先を祀れる所なるべし。その一層大なるものには出雲大社あり。その最も大にして日本の鎮守たるも



鎮守の森

のには、五十鈴川の上に宮柱太しきませる伊勢大神宮もあ
らせ給ふなり。

これを小にしては一村の中心にして、これを大にすれば
帝國の中心なり。祖先の神靈、前賢の精魂は、長へに鎮守の社
中に留りて、子孫後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵自進せ
しむべし。

されば鎮守の森をして、一層一村一郷の中心たるの實あ
らしむべきなり。森をして神さびしめ、靈の窟宅たるに適せ
しむべきなり。これがためには、樹の苗を植ゑ、雜草を去り、祠
宇を修め、園池を美にすべし。一村一郷の崇敬地たらしめ、遊
樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき田夫にも美の觀念を

窟宅

伐 誇 矜

與ふる所、村人の誇とする所、他郷にありても猶戀々の懐あ
るべき所たらしむべし。小學兒童の運動會も、之を中心とし
てこの附近に行はしむべし。小やかなる村落圖書館のごと
きも、このほとりに設けられなば最も妙なるべし。鎮守の森
をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の
上に得るところ極めて大なるものあらん。

(笹川臨風 明治實業讀本)

練習一、左の語句を解釋せよ。

拜殿に晝寢の夢圓かなり

涼を趁ふ村人の影婆娑たり

祠頭の旗幟翻々として風に靡く

他郷にありても猶戀々の懐あらしむ

二、 祀祭 饗受承 の區別を問ふ。

一〇 法律格言

- 一 君主は死せず。
- 一 人は行爲によつて責任を生ず。
- 一 自ら爲し得ざることは、他人をして爲さしむることを得ず。
- 一 地主なきの土地なし。
- 一 罪悪は死亡によつて消滅す。
- 一 刑は公に宣告す。
- 一 意思は自由なり。
- 一 犯意なき所爲は罪とならず。

- 一 法律を知らざるを以て其の罪を免るゝことを得ず。
- 一 検事は法律の番人なり。
- 一 疑はしきは輕きに從ふ。
- 一 軍艦は領土の延長なり。
- 一 公益は私益を壓す。
- 一 原則には必ず例外あり。
- 一 法律は權利の上に眠るものを保護せず。 (明治讀本)

經濟用語 (二)

- | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 供給 | 需用 | 販賣 | 卸賣 | 購買 | 仲買 | 相場 | 委託 | 勘定 |
| 交換 | 返濟 | 手形 | 保險 | 豫約 | 配當 | 價格 | 値段 | 商標 |
| 傳票 | 爲替 | 兩替 | 振出 | 仕譯 | 負債 | | | |

一一 樂地

如何なるところにも楽しきところは有るべし。又如何なるところにも楽しからぬところ有るべし。花笑ひ鳥歌ひ、天長閑に霞み、水ゆるやかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に満つべくはあらず。朝の曇には雨と疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、あるは暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覚え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪無き話の興を湧かし、ぬく灰はたく焼芋のあたゝかきに笑むをか

晒笑
嗤

しさも有るべし。金殿玉樓にも楽しからぬ折は有るべく、茅屋にも楽しき處はあるべし。

楽しきところ、楽しむべきところを見出し得れば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人はおのづからに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることも有るべし。さ無きまでも、人若し常に楽しからぬが中に楽しき地を見出さんことを心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も濶く氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世を楽しく過ごすやうになるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

むかし、或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩實に重かりければ、二人共憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しみの餘りに、江州ならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし、身すぎの道に苦しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとも思ふなり」と、溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、卿の苦しむほどは我も亦苦しみて、かく息も喘ぎ汗も流るゝなり。されども我は然おもはず、此の碓氷の山を十ほども重ねたる高き山もあれかし、さらば數多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。其

の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」と、云ひしとなり。

同じ苦艱の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀。よくく思ひ味ふべきなり。(幸田露伴 洗心録)

〱

左の文に誤あらば正せ

身を修め家齊ふ

勤勞はよく家を富ましめ、又よく國を富ますものなり

其の禍を地方の經濟上に波及するに至る

一二 武士道

武士道は、其の起原極めて遠く、殆ど日本民族と共に成形せりといふを得ん。然れども、その殊に發達せしは鎌倉時代より徳川氏の末に至るまで、凡そ六百六十年間なり。かの武士の行爲を支配せしものは即ち武士道にして、其の一種の道義として我が邦の文明に關係ある、決して少々にあらざるなり。

武士道はストア哲學に似たれども、ストア哲學の如く理論に富むものにあらず。而して其の果斷決行の精神迥かに之に優れり。又武士道は中世の騎士風ニに似たれども、騎士が婦女救護を主とするが如く、女性崇拜に流るゝものにあらず。

希臘時代の末期に起れる實踐哲學

十字軍時代に成りし一種の武士の階級



ず。然らば何をか武士道といふか。武士道は實行に伴ふ一種の精神的訓練に外ならず。蓋し日本固有の尙武の氣象これが基礎にして、後、儒教と禪と之に交り、此の三者の融合調和によりて發達せるものにて、我が邦に一種特異なる産物と謂ふべし。若しそれ人倫の變に臨んで、秋霜烈日の如き志氣を與ふるものは武士道に若くはなし。此の點に於ては、ストア哲學と雖も騎士風と雖も、同日の談にあらざるなり。

我が兵士が最近數次の大戦争に於て、人目を眩すべき武勇を顯はしたるは、單に器械の結果と謂ふべからず。若し器

械の結果ならば、勳功は器械にあり、兵士にあらざるなり。我が兵士の武勇を以て器械の結果とするは、我が兵士を侮辱するものなり。思ふに、武士道は封建制度の廢せられたると共に壞滅せしが如しと雖も、是唯其の形骸の壞滅のみ。其の精神は猶兵士の頭腦中に存續せり。唯これあるを以て能く非常なる武勇を顯はすを得たるなり。精神は本、器械は末。器械は之を運用する精神如何によりて功を存するものなり。精神が器械によりて變更せらるゝが如きは、決してあり得べからざることなり。是故に我が兵士の武勇の盛んなるは、其の武士的精神あるによることまた疑なきなり。

武士道は、獨り兵士に必要なりと謂ふべきにあらず、凡そ

扶翼

志士たるものに必要ならざるはなし。その故如何。社會は善惡正邪の戰場なり。其の中に投ぜられたる志士は如何なる任務を負へるか。これ言ふまでもなし、一方に於ては善を助け正に與みし、以て人道を扶翼し、又一方に於ては惡を斥け邪を撃ち、以て異端を撲滅するにあり。故に武士の一生は閒斷なき戦争なり。志士は精神界に於ける武士なり。されば平生武士道の心得なかるべからざるなり。

固より今日にありては、如何なる志士も、單に武士道のみによりて何等の成功をも期すべからず、必ずや精確なる科學的知識なかるべからず。然れども、精確なる科學的知識は、譬へばなほ銳利なる器械の如し。器械を運用するに武士道

的精神を要するが如く、知識を運用するにも亦これ無かるべからず。知識は吾人に、明瞭に吾人の取るべき方法を示すものなり。吾人が吾人の取るべき方法を知りたる以上、如何なる舉動に出づべきかは、全く吾人の精神如何に關するなり。然るに、若し斯かる場合に於て、志士たる者、必ず果斷決行を要すとせば、武士的精神を取るに若くはなし。(井上哲次郎)

〔文法〕

美なるかな 我が武士道的精神

わが精神界に 武士道 あり

吾人の取るべき方法を

知識は明示せり (文の成文の顛倒)

〔練習〕

次の語句の意義を問ふ。

人倫の變に臨んで秋霜烈日の如き志氣を與ふ

騎士風と同一の談にあらざるなり

善を助け正に與みし以て人道を扶翼す

惡を斥け邪を撃ち以て異端を撲滅す

一三 管鮑之交

管仲夷吾者、穎上人也。少時常與鮑叔牙游。鮑叔知其賢。管仲貧困、常欺鮑叔。鮑叔終善遇之、不以爲言。已而鮑叔事齊、公子小白、管仲事公子糾、及小白立爲桓公、公子糾死、管仲囚焉。鮑叔遂進管仲。管仲既用、任政於齊。齊桓公以霸九合諸侯、一匡天下、管仲之謀也。

管仲曰、吾始困時、嘗與鮑叔賈、分財利多自與、鮑叔不以我爲

貧_レ知_レ我_ガ貧_チ也。吾嘗_テ爲_ニ鮑叔謀_ニ事_ヲ而更窮困。鮑叔不以_レ我_ヲ爲_ニ愚_ト。知_レ時_ニ有利_ト不利_ト也。吾嘗_テ三仕_ヘ三見_レ逐_ハ於_ニ君_ニ。鮑叔不以_レ我_ヲ爲_ニ不肖_ト。知_レ我_ガ不_レ遭_ハ時_ニ也。吾嘗_テ三戰_ニ三走_レ。鮑叔不以_レ我_ヲ爲_ニ怯_ト。知_レ我_ニ有_ニ老母_ト也。公子糾敗_レ召_レ忽_ニ死_ニ之_ニ。吾幽_ニ囚_ニ受_レ辱_ヲ。鮑叔不以_レ我_ヲ爲_ニ無_レ恥_ト。知_レ我_ノ不_レ羞_ニ小節_ト而恥_レ功名_ヲ不_レ顯_ハ於_ニ天下_ニ也。生_ル我_者父母_ニ知_レ我_者鮑子_也。鮑叔既進_ニ管仲_ヲ以_レ身_ヲ下_レ之_ニ。子孫世祿_ニ於_ニ齊_ニ。有_ニ封邑_ト者_{十餘世}。常爲_ニ名大夫_ト。天下不_レ多_ニ管仲_ノ之_ニ賢_ト而多_ニ鮑叔_ノ能_レ知_レ人_也。 (司馬遷 史記)

一四 漢詩二首

貧交行

翻_キ手_ヲ作_レ雲_ト覆_キ手_ヲ雨_ト。

紛紛_ニ輕薄_ト何_レ須_レ數_ト。

君不_レ見_ニ管鮑_ノ貧_ニ時_ノ交_ト。

此道_ニ今_ニ人_ノ棄_レ如_レ土_ト。

(杜甫)

題長安主人壁

世人_ノ結_ニ交_ト須_レ黃_ニ金_ト。

黃_ニ金_ノ不_レ多_ト交_ト不_レ深_ト。

縱_レ令_ニ然_ト諾_ト誓_ト相_レ許_ト。

終_ニ是_ト悠悠_ト行_レ路_ノ心_ト。

(張翥)

一五 報知謝絕

一 安著報知

前畧 仰地深在中 任彼世由吾活 尔強 殊尔
 出立の首は古禁在中 任見送り下され 殊尔難
 有存下小 任後世心 添小より車中 七寒くを

受之は昨秋五種戸小一泊本日午後三時一同
 之氣よく安着致し小引出安神下され夜小出懸
 念下さきし手荷物類聊も破損なく不殘糾
 着致し小先取以そき安着の通知申上度
 餘も後便にと 頓首

二 商況を報ず

急啟 愈々御清稔大賀此事小其後当地
 の市況も以てさる活氣を呈し來り彼東北地
 方の水害は多少の乾畑これあるべきも心配する

ほど此事もなると存じ小以て速收獲
 後小相成候はゞ一層好況を呈すべき事と相
 考居候も今より商不準備致し置き度別紙
 の通りイよりテまでの品取合せ甚急申送
 為下され夜候先づも当地商況は報かたぐ
 中入小 匆々

三 招待をことわる

御懇書難む拝誦仕り候相明晩は風流の由僅
 しくして敷ならぬ迄生まで追加下されいつもな

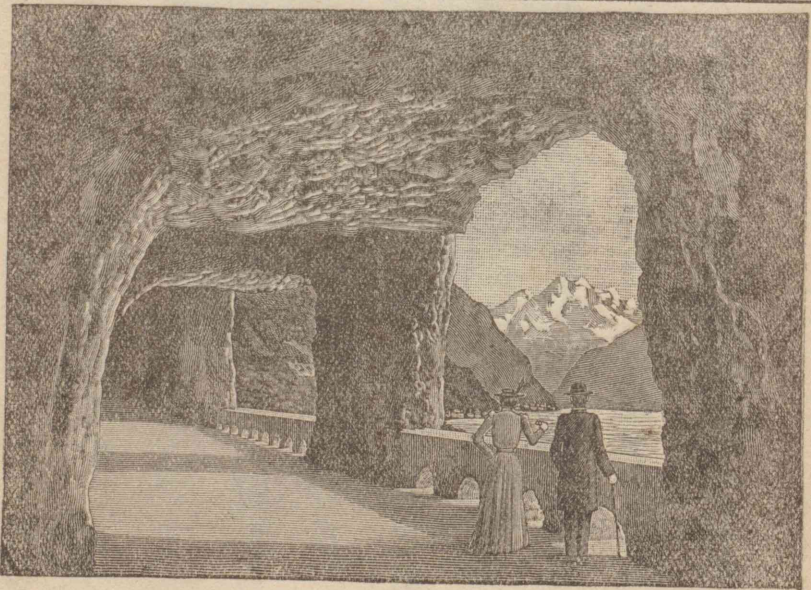
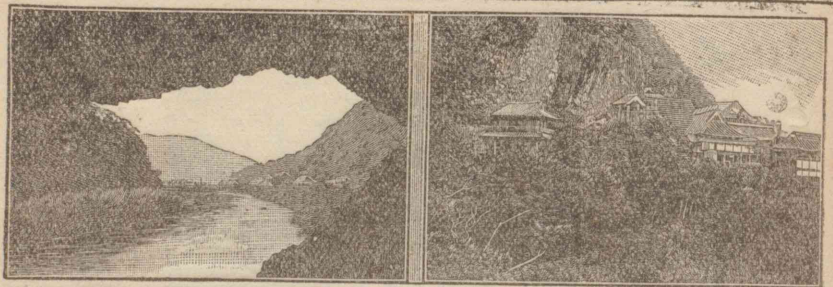
ちらの山厚志深く感謝はりい何を措きとも極
 冬を渡り夜徹しども生得四五日前より感冒も侵
 され引籠りたりお出政一難くいへば何卒あし
 からずお思召下され夜は別席の諸君も堂々
 くお鶴撃下さす度いづれ全快上持得止極
 中よくいども一應お挨拶し之夜お初儀謹言

一六 山の美

唐人巖を雲根と呼べり。趣あるかなこの稱や。雲、山より起
 り、山雲を得て愈美に、益奇に、一層々に大を添ふ。若しそれ雲

藕絲

日本の耶馬
 溪と瑞西の
 アルプス山
 遠景



縷々として藕
 絲の如く山の
 背腹を曳くや、
 宛として神女
 の羅裳を織る
 に似、朝暎、夕陽
 會、これと映發
 して、純紅なる
 こと火の如く、
 羅裳、桃花色に
 染めなさる。條

山の美

澎湃

忽にして雲來往し、迅速に澎湃として天を捲き、百道狂馳、山その間より或は湧き或は没し或は浮び或は沈み、汎々として大海上の島嶼と化成す。

繚繞

頃刻にして空氣の運動靜穩となるや、雲は漸く下降して山腹に繚繞し、其上より絶頂の峭然として孤尊なるを觀る。要するに山雲を得、雲山を待ちて相互に愈、美に、益、奇に、一層々に大を映發す。

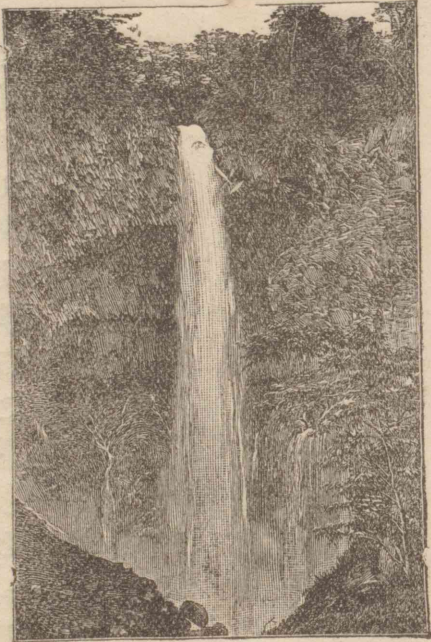
藍靛

水、山に在りて愈、美に、益、奇を成す。平面世界に在りて看得べからざる其の現象も、山にては能く認め得らるべし。水の最も晶明なる者、最も平和なる者、最も藍靛なる者は、山中の湖これを代表し、水の最も激烈なる者は、山陰の瀑布之を代

怒 忿
憤 恚
瞋 恚

表し、水の最も清冽なる者、最も可憐なる者は、山間の溪水これを代表す。凡そ水の睡り怒り笑ふ狀貌は、山に入らずんば竟に見るべからず。然のみならず、巖は水を承けて緑潤となり、水に蓄まれて奇態怪狀を呈出す。水の美、水の奇は、山を得て茲に大造し、巖の美、巖の奇は、水を待ちて始めて完成せり。

日光華嚴の
總



平面世界に在る花木は、自ら平面世界の感化を受け、かつ人間に成長するを以て、之れが爲に豪健磊落ならず。畢竟艶を競ひ媚を呈するもの往

風餐雨虐

々然り。山中に在る花樹に至りては然らず。自然の儘に成長して人間外に不羈獨立するが上に、時に風餐雨虐、或は土壤を剥がれ、或は巖石に壓抑せられて、悍然勇往、一層々に不羈獨立の素養を助長し來る。要するに、山中の花は豪健なり、磊落なり、氣骨あり。況や花は山に開きて愈鮮に、木は山に長じて益蒼翠秀潤を添ふ。花樹の妙所を大悟せんと欲せば、山に入らずんば竟に得べからず。

藐視

山に登りて下瞰するも、猶且、街上來往の人を藐視する概あり。東京愛宕山に登りて四望するも、なほ且、廣遠の氣象胸中より勃發するを覺ゆ。何ぞ況や、嵯峨として天に接せる高山に登るをや、山に彩色絢煥あり。雲の美、雲の奇、雲の大あり。

絢煥

頓悟

水の美、水の奇あり。花木の豪健磊落なるあり。萬象の變幻や、かくの如く山を得て大造し、山を待ちて映發するのみならず、その最絶頂に登りて下瞰せば、雲煙脚底に起り、平面世界の形勢は吾に向ひて長揖し來り、悉くこれを掌上に弄し得べきなり。吾こゝに到りて人間の物にあらず、宛然天上に在るがごとく、若しくは地球以外の惑星より眺觀するに似て、眞箇に胸宇を宏恢にし、意氣を高邁ならしむべし。加ふるに山の組織の壯絶なるを頓悟し、山の形體の完美なるを大覺し、漫に大氣の清新にして洗ふが如き處に長嘯し、かねて四面の闐然寂靜なる裡に潛思默想せば、吾が頭腦は神となり、聖となり、自ら靈慧の煥發するを知るべし。いはんや山に登

潛思默想

ること愈、高ければ愈、困難に、益、登れば益、危険に、愈、益、萬象の
變幻に逢遭して、愈、益、快樂の度を倍加するに至らん。
之を要するに、山は自然界の最も興味ある者、最も豪健な
る者、最も高潔なる者、最も神聖なる者、登山の氣風興作せざ
るべからず。(志賀重昂)

一、左の語句の意義を問ふ。

雲縷々として藕絲の如し

宛として神女の羅裳を織るに似たり

胸宇を宏恢にし意氣を高邁ならしむ

四面の間然寂靜なる裡に潛思默想す

二「愈」と「益」との二語を含める短文を作れ。

一七 銷夏日記

今標の一節
慈願の作

七月一日 『今年も半ば過ぎにけり』と鄰の女兒うたふ。

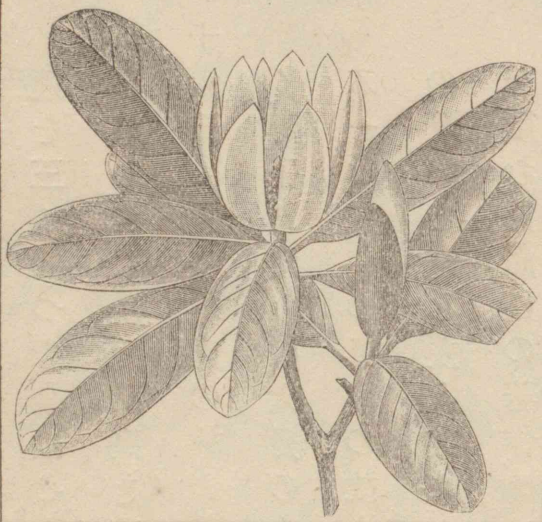
三日 半夏生。反て雨なり。籬の楓枯れし迹に女竹五竿植う。

今植ゑた竹からも

來る嵐かな

とは古人の句、雨洒ぎて婆娑
たる、木には見られぬ趣深し。

八日 三日月清し。今夕はじめ
て近きあたりの大榎に蛸の
鳴くを聞く。



泰山木の花

酒注
瀉灌

十三日 鄰家の翁、杉籬ごしに『泰山木の花咲きたれば見に

來よといふ。往きて見る。葉は交讓木のそれに似、花は白木蓮を三つ四つも合はせたる程にて、芳香譬へん方なし。富麗にしてしかも品高き花なり。

十六日 去年近處の林より移し植ゑし山百合はじめて開く。返子あたりは六月の中旬を盛とするに、一月も後れたる。一は今年の氣候の故なるべし。盡日細雨煙の如く、原宿の夏いと寂し。友人某より寄贈せられし畫聖ラファエロを讀む。眞面目の著作。ラファエロ及び其の時代の一斑を窺ふに倔強なる手引草なり。

十七日 嫁菜の花一輪咲く。こは去秋京都に遊びて、山陽先生の山紫水明處の下なる磧より掘りて來しものなり。立

東京府豊多摩郡

三木河野



菊(1) みざあ(2) 貝細工(3) 百日草(4) 千鳥草(5) 撫子(6) 桔梗(7) ぎふあひ(8) のんせう花(9) くす(10) わまひ草(11)

ちて見る程に、

水の音も心もともにすみゆきて

月夜しづけき秋の賀茂川

と詠みし、その折の清興水の如く湧きかへり來ぬ。午後澁^{*}
谷の川に鮒釣に行く。水まさりて青蘆を没し、川柳の偃し
て小さきアーチを作れるを、心得顔の水馬ついで潜り
行けば、犬蓼の花搖ぎて、小さき蛙のざんぶと水に飛びこ
むも興あり。時々雨しぶきて、風景みるく淡墨の畫にな
りゆく。傘・蓑・笠こゝら見えたれど、獲物ありとも思はれず。
我も一尾を得ず、蝸に螯されて歸る。

十八日 菊に肥料を遣る。花を愛し初めていつしか糞尿も

^{*}東京府豊多摩郡

厭はしからずなりぬ。糞尿を愛するにあらず、花を愛すればなり。清濁併せ吞む」といふこと、耳の痛きほど聞き知り居れど、わが量狭ければ、異を嫌ひ非を悪みて自ら世を窄うす。はづかしきことなり。

二十日 朝の程日影さし、かば、貝細工の花いと美しく開きしに、やがて曇りたれば、乾びたる鱗々の花瓣、見るが内につぼみぬ。またの名を萬年草といひて、盛の時に摘み蕊をだに去れば、萬年も色を保つといふ花なれば、少しの濕氣をも厭ふにこそ。心に染むことかな。たれか爾にかくみづから愛惜することを教へつる。

廿五日 晴。夙起。小園を歩すれば、蟲の聲きよく、杉籬の蛛網

桔槔

露を帯びて白絹の光あり。撫子花、檜あふぎ、百日草、千鳥草、桔梗、日まはり、葛鼓、薊、金蓮花など露に濡れそぼちて、夢いまだ醒めじと見ゆ。亞米利加白薊、またの名、水蝶花を隅の方に捨植になし置きしに、何時の間にいと大きくなりて、美しき花を著けたり。先年の夏、母上の此の花を見て「西洋の花は皆丈夫なり。他に頓著なく、己が咲くべき花を咲かせて逞しきを見よ」と宣ひし一語、耳に響きしより、この花を見る毎に、その語を思ひ出でずといふことなし。夕方、樺色の雲、西鄰の桔槔の末に浮びて、蝸の聲涼し。(徳富蘆花)

【文法】 鄰の女うたふ。(主婦の修飾語)

水蝶花美しき花を着けたり。(客語の修飾語)

風景みるく淡墨の畫になりゆく (補語の修飾語)

嫁菜の花一輪咲く (述語の修飾語)

續

次の語句を解釋せよ。

清濁併せ飲む

異を嫌ひ非を惡みて自ら世を窄うす

誰か爾にかく自ら愛惜する事を教へつる

一八 畫虎類狗

馬援嘗曰大丈夫當以馬革裹屍安能死兒女手交趾反馬援以伏波將軍討平之武陵蠻反援又請行上愍其老援被甲上馬據鞍顧眄以示可用上笑曰覆餗哉是翁乃遣之

援在交趾嘗遣書戒其兄子曰吾欲汝曹聞人過如聞父母名耳可聞口不可言好議論人長短是非政法不願子孫有此行也

龍伯高敦厚周慎謙約節儉吾愛之重之願汝曹效之杜季良豪俠好義憂人之憂樂人之樂父喪致客數郡畢至吾愛之重之不願汝曹效之也效伯高不得猶爲謹敕之士所謂刻鵠不成尙類鶩也效季良不得陷爲天下輕薄子所謂畫虎不成反類狗者也

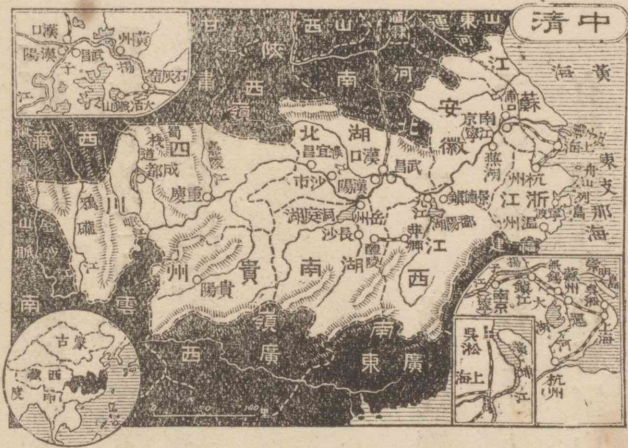
(十八史略)

一九 揚子江湖航

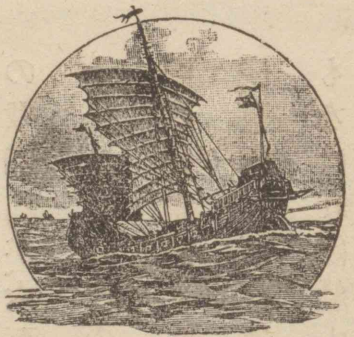
予は今朝長沙を去りて漢口に歸航する湖南汽船會社所有船湘江丸の客室中にあり船は既に湘江を出でて洞庭湖に入れり風あり波あり時に雨あり冷氣秋の如し乃ち小閑を得て長江湖航を略報致すべく候

極目

七月九日夜九時、上海に於て大阪商船の大吉丸に乗込み候。九日の夜といはんか十日の曉といはんか、我が大吉丸は既に長江の本流に入れり。江といはんか海といはんか、極目際なし。唯茫茫として月影の江心に湧くあるのみ。快眠の後甲板に出づれば、兩岸の風色我が精銳なる雙眼鏡の力を假りて始めて仔細を辨ず可し。叢生したる蘆葦は定めて北清の高梁と其の長を競ふ可く、柳蔭の民舎は槩ね蘆葦を以て葺けるが如し。水邊に眠る水牛、水草の裏に



*一清里は我が五町六間に當る



魚を撈る漁夫、而して往來織るが如き小帆・大帆、悉く指願の間に在り。然も長江の大には何といふとも平身低頭せざるを得ず候。此の邊は四十清里の河幅に候ふ由、その大いさ加減御察しこれあるべく候。即今揚子江は増水すること四十尺以上と聞及び候。正にこれ長江最大膨脹の季節に候。

船中無事、唯長江圖説によりて其の地理を察し、其の雄偉壯大なる光景に應接するか、然らざれば籐椅子によりて、江上の涼風を滿面に受けつゝ、晝寢を貪るあるのみに候。

渺々^{スル}奔波與岸平、
半江雷雨半江晴、

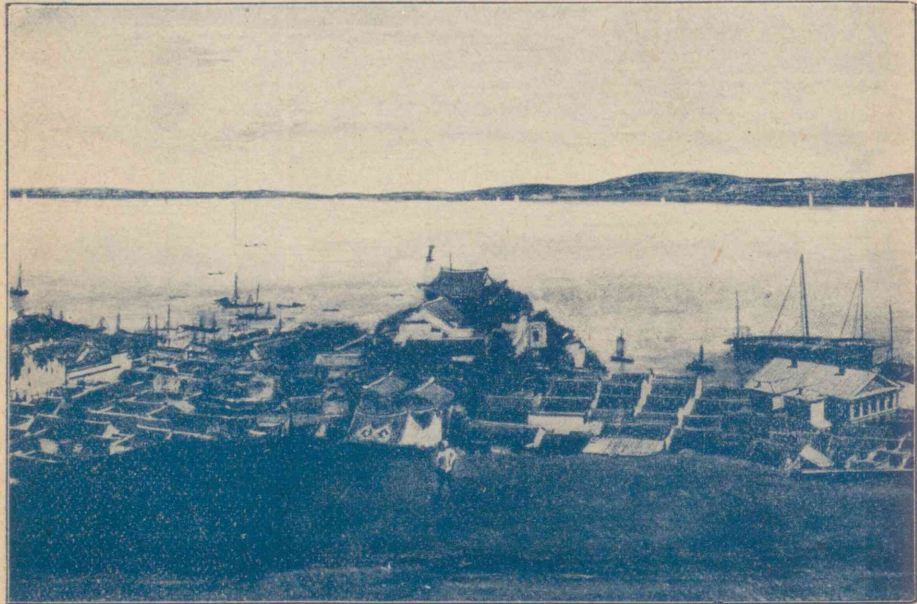
虚構

布帆多在柳梢上。

掠水沙禽不識名。

是は全くの實景に候。一字の虚構なし。夕立の空より廣き
 武藏野の原と太田道灌が詠みたる句も今更思ひ出され
 申候。ただ「與岸平」と申せ共、時としては岸上に流れ申候。漢
 口平水五十尺と申せば今日にては九十尺也。一萬五千噸
 の戰鬪艦が、六百哩の上に溯るも決して不思議に無之候。
 十一日は長江の雨景を眺め候。南京即ち金陵に著したる
 頃は江雨霏々たり。鐘山も江雲模糊の裡に半ば封ぜられ
 候。蕪湖に至れば大雨沛然盆を傾くるが如し。別に致し方
 もなければ船中備付の書を読みて閑を消し候。
 十二日は長江航行中最も獲物多き日に候。安慶府に抵れ

中 裡 内



(二の其・一の其) 昌武よ楊子江を隔てて漢口・漢陽を望む

肥後にあり
急流を以て
有名なり

豎建
立樹
起

鼎立

ば江畔に高塔の聳立するあり。唐宋詩人の好題の一たりし小孤山は、縦令増水の爲に平生よりも深く其の腰骨を洪濤に没したるも、なほ滾々たる長江の楫柱として其の中心に屹立するあり。天下の險と稱せられたる馬當山は、球磨川の所謂る槍流しを大仕掛にしたるものにして、江流廻環、小渦・大渦・大々渦の其の下に千轉萬合しつゝある、人をして爲に毛髮を豎てしめ候。

十三日は大冶の鐵山を遙見し、薄暮漢口に著し候。漢口は武昌府と江を隔て、相對し、恰も馬關と門司との如し。更に漢水の來會する頭に漢陽あり。鼎立の姿をなし、洵に南清の雄鎮に候。著船と同時に湖南汽船會社の本幡氏來船

汜濫



し、同夜直ちに同社の湘南丸が長沙に向けて發航するに
つき同行すべきやとの誘引有之、一議に及ばず、渡に船の
心地にて直ちに乗移り申候。
十四日、目覺むれば身は湘南丸の上にてありて、漢口上流の
揚子江を溯りつゝあり。此の邊江口より六百餘哩の上な
れど、江の幅はなほ一哩以上或は二哩に
も及ぶ可し。否江水の汜濫横流に至りて
は依然森茫たり。江岸には隨處水牛群を
なし、兒童の水牛を驅使するや狗兒を扱
ふよりも容易なるが如し。耕作には固よ
りこれを使用致居り候。其の江畔の柳蔭

倒仆
顛斃

に、兒童が牛背に腰を掛けて悠々たる様は、宛然一幅の畫
に候。而して増水の痕跡は隨處にあり。根拔の柳樹など到
る處に倒れ居候。
十五日、起ちて江水を見れば既に碧なり。乃ち船の洞庭湖
に入りたるを知る。九日以來赤味噌汁の如き江水の中に
生活したる此の身に取りては如何に有難かりしよ。直ち
に洞庭湖水の水風呂に浴し、心身爽快に相成申候。湘江に
入れば碧愈碧、江流も漸く縮りて始めて河らしく感じ候。
申迄もなく洞庭湖の見物は、大筏に候。一個の筏の上には
十數軒の家あり、豚も飼へば鶏も養ふ。時としては野菜畑
さへ有之、遠く望めば一村落の如し。然り、一村落が筏とな

りて洞庭を過ぎ漢口を経て蕪湖に達し、此處にて豚・鶏等
悉皆賣捌く由に候。(徳富蘇峯 七十八日遊記による)

二〇 朝見の盛儀

大正元年七月三十一日午前十時、今上天皇皇后兩陛下に
は、文武百官を宮中正殿に召して謁を賜ひ、朝見の盛儀を行
はせ給ふ。各宮殿下及び同妃殿下には、御正装にて定刻前參
内、兩陛下に御對顔あり。内閣總理大臣、樞密院議長、樞密顧問
官以下華族及び文武官同夫人等數百名は、十時朝集所に參
集し、式部官の先導にて正殿に入り著床す。

天皇陛下には、宮内大臣、式部長官の前行に依り、大元帥の

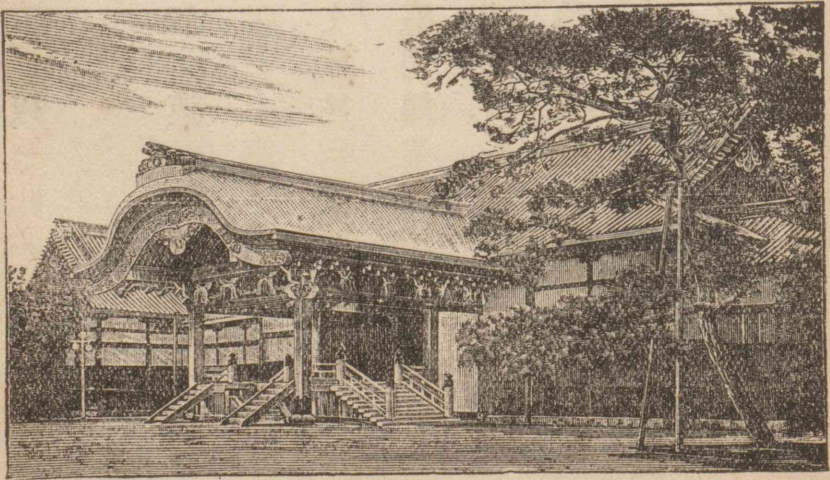
扈從

宮城東御車

御正装にて正面御椅子に著御あ
らせられ、侍從劍璽を奉じ、各皇族
殿下扈從し奉る。皇后陛下には、皇
后宮大夫の前行により、各妃殿下
を從へさせられ、聖上陛下左側の
椅子に著せらる。此の時衆員起立
して最敬禮を行ふや、天皇陛下に
は玉音朗らかに左の勅語を賜ふ。

勅語

朕俄ニ大喪ニ遭ヒ哀痛極リ罔
シ但タ皇位一日モ曠クスヘカ



朝見の盛儀

ラス國政須臾モ廢スヘカラサルヲ以テ朕ハ茲ニ踐祚ノ式ヲ行ヘリ

顧フニ先帝睿明ノ資ヲ以テ維新ノ運ニ膺リ萬機ノ政ヲ親ラシ内治ヲ振刷シ外交ヲ伸張シ大憲ヲ制シテ祖訓ヲ昭ニシ典禮ヲ頒テ蒼生ヲ撫ス文教茲ニ敷キ武備茲ニ整ヒ庶績咸熙リ國威維揚ル其ノ盛德鴻業萬民具ニ仰キ列邦共ニ視ル寔ニ前古未タ曾テ有ラサル所ナリ

朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサランコトヲ期ス有司須ラク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シ

宏謨

テ忠誠ヲ致スヘシ爾等克ク朕カ意ヲ體シ朕カ事ヲ獎順セヨ
勅語終るや、内閣總理大臣西園寺公望、御前に參進し、恭しく左の奉答を爲す。

登遐

彝訓

臣公望誠惶誠恐伏シテ言ス大行天皇奄ニ登遐アラセラレ臣民憂懼措ク所ヲ知ラス今勅聖文武ナル天皇陛下大統ヲ承ケサセラレ茲ニ彝訓ヲ垂レ給フ聖猷遠ク慮リ睿圖遺スナク上ハ先帝ノ鴻業ヲ繼ギテ憲法ノ條章ニ循ヒ下ハ億兆ノ和協ヲ獎メテ忠誠ノ至情ヲ輸サシメ以テ祖宗ノ休光ヲ無窮ニ發揚セントシ給フ是レ寔ニ宇内ノ齊シク仰ク所ニシテ臣庶ノ永ク賴ル所ナリ 臣等聖勅ヲ拜

シ感激ノ至ニ勝ヘス今ヨリ後益、匪躬ノ節ヲ效シ夙夜淬礪邦家ノ進運ヲ扶翊シ以テ聖旨ニ答ヘ奉ランコトヲ誓フ臣公望誠惶誠恐頓首謹ミテ奏ス。

かくて兩陛下には順次入御遊ばされ、朝見の盛儀こゝに終れり。

一、和衷協同 匪躬ノ節 夙夜淬礪 の意義を問ふ。
二、洒注灌 建立樹 倒仆斃 の區別を問ふ。

二一 君臣相遇

米澤藩老荏戸九郎兵衛精勤國務老而不倦鷹山公慮其耗精生疾使紀平洲勸其遊息自養平洲即至其家曰今日奉公命

民庶

泣然

上杉鷹山公の肖像



至子慎聽之九郎謝曰某有酒癖公豈禁之耶自今慎不飲矣平洲曰否子年老務劇恐生疾病子少自養之是公命也九郎駭曰甚矣公之不思也公以爲今如何時耶國用不足民庶不定某任老職夙夜精勤猶恐其不至乃務自遊息將措一國民庶于何地因泣然泣平洲復命誦之公曰九郎老尙如此九郎而疾明日誰當代九郎者亦泣然泣平洲出語人曰米澤君臣相

遇如此治績安得不顯耶

贊曰古人嘗稱英雄多泣余謂必英雄而後泣兒女雖泣非泣也無他兒女之泣淺出于眼而英雄之泣深根于心故君而不泣

君臣相遇

七七

非仁君也。臣而不泣。亦非忠臣也。今觀米澤君臣之泣。而其仁且忠可知矣。宜其民至于今猶泣而思於君也。
(齊藤竹堂)

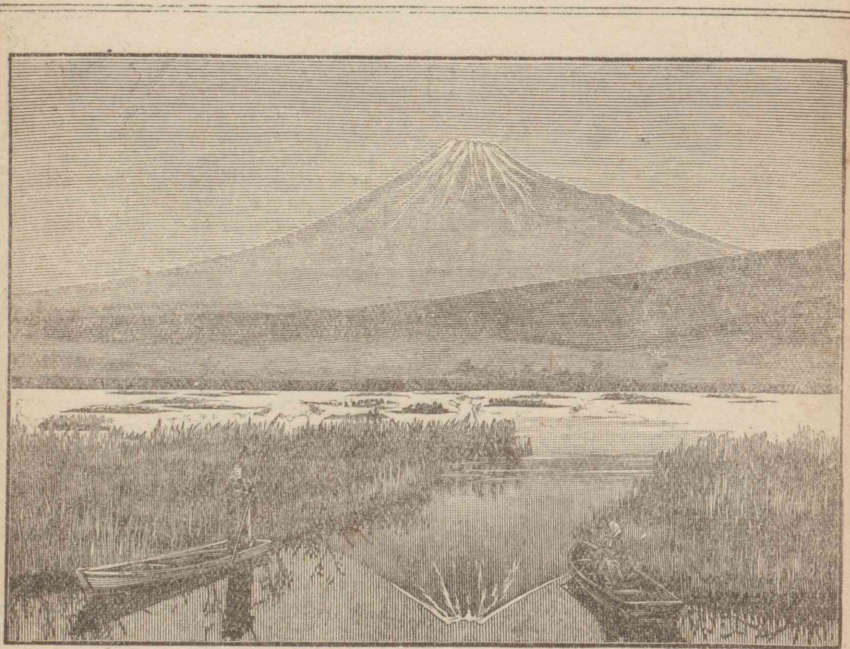
二二 富士の高嶺 (二)

車々
落暉
漣漪

靜坐してこの玄靜なる富士の高根を想ひ、更に憶うて余が岳南の曾棲村に至れば、歸牛車々、落暉を帯びて靜に渡る小川の漣漪にも岳影皺み、千本松原の露落つること多きところ、欵帆、仄帆、みを清灣に涵せるこの高根の上を行き、縉紳の別墅の楣間を照す紫嵐の色は、また尋常一様の家に入る。瞑目して其の美を心に描けば、悠遠崇高にして、一たび登りて其の高を窮めんと欲する念に堪へず。今茲七月念三日、終

に登る。

函嶺より望めば、晴巒雨峯を壓して高く雲漢を抜く山あり。上峰は五朶を成せり。上青天と連なり下白雲と接す。車の行くに隨ひて四朶となり、三朶となり、既にして又四朶となる。雪は日を得て雲母の色をなし、陰は紫嵐を凝らせり。御殿場に至りて客舎に



富士の高嶺 (一)

亭午

東道

戒誠
箴警

就く。日は亭午に近し。主人曰く「登岳の客は皆平坦にして行く。貴客は京人、躋涉の具に乏しからん。剛力を備へ」と。剛力とは綿衣、草鞋、食糧を負うて客の東道をなすもの、余や應ぜず、直に飯を命ず。飯終る。馬を喚ぶ。馬來る。まづ草鞋數隻を買ひ來らしめて之を腰間に帶び、騎して發す。主人送りて戒めて曰く「岳上日暮寒きこと甚だし。石室の中に宿すといへども、衾を重ねて纔に困夢を得るのみ。殊に平坦の如きは朔風獵々として、加賀の白山を度り、甲州の諸山を掠めて直に岳に至り、寶永山の洞窟してこれを吸ひ、横ざまに缺處より吹く。砂礫殘雪みな活きて走る。終に雲を呼び雨を喚ぶ。既に雲に路を偷劫せられ、さらに狼雨に逢はば、或は恐る貴客之く

徂徠
頻連
累

ところを失はんと。余は鞍土に據り顧盼して以て勇を示し、韁を按じて行く。仰ぎ見れば岳影忽ち亡く、風色甚だ悪し。馬夫面を仰いで曰く「雨將に來らんとす。然れども山は應に美晴なるべし」と。雲の徂徠すること頻りなり。中に隠々として岳影のさながら斷霞のごとく紅なるを見る。

一路燕麥香し。馬鈴の音を趁うて胡蝶亂れ飛び、夢の神をそのやさしき翅に載せて我が懷に送る。既にして大嘶聲あり。夢覺むれば急阪馬頭より起る。馬夫曰く「回馬阪なり」と。馬を舍つ。賣茶の翁に茶を乞うて喫し、且憩ふこと少時。これより矮樹と長草、路は逶迤してその間に通ず。窮まりて一字あり。金剛杖を賣る。これを購ふ。長さ五尺、六稜角をなす。

珊々

既に登れば、草樹漸く短く漸く少し。初めは人を没し、次には帽に及び、次には肩、而して袖、而して行膝、歩に隨ひて漸次に短少となる。遙に望めば草色煙の如く迢々として雲に入る。近づけば却りて無し。ただ蓬の處々に散點して、あはれにつやなき花を咲き亂せるのみ。終に一合目に至る。路は爛砂の上を走れり。顧れば近山、遙水甚だ鮮明に、身は既に人寰を抜くこと幾百尺の上にある。

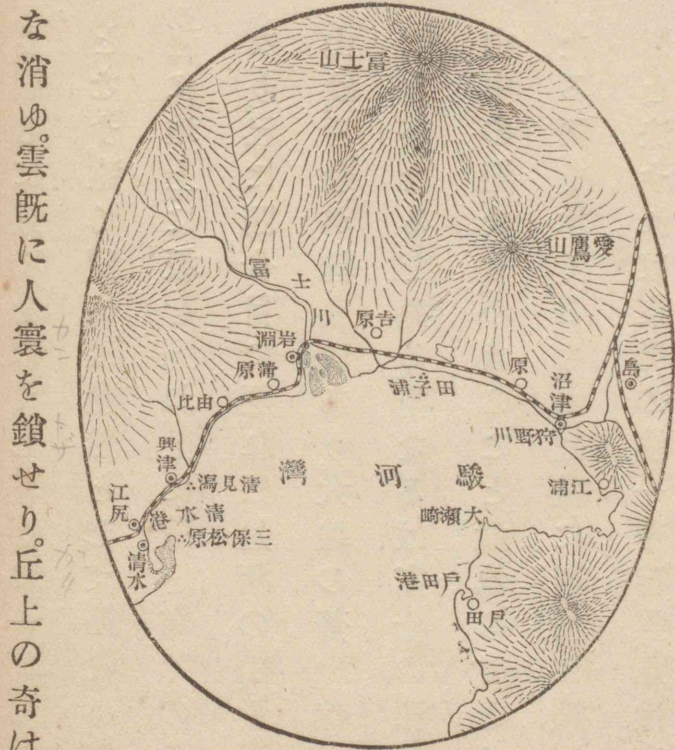
鞋を没する砂は淨うして織埃なし、踏みて行けば珊々として聲あり。已に二合目に至り、更に三合目に至る。石室あり。茶を賣り、菓子を賣り、卵と鞋とを賣る。およそ一合ごとに石室あり。皆山骨の露出せる處を相し、これを背にして屋を造

四坡

り、圍むに累石を以てし、僅かに一面を缺きて出入のところとなす。遠く望めば隆然として凸せり。室に入れば方三四弓、直に地上に板を列ね、上に蓆を布くのみ。巖華寂寞頗る幽陰なり。已に四合目に至れば、足柄の山、愛鷹の山、及び甲州の諸山は、皆余が鞋底にあり。大地の蒼々然たる所に兩碧の甚だ明らかなるを見る。南なるは富士の沼にして、東なるは甲州山中の湖なり。小なること盆池のごとく、膚寸の雲の帯び得たる雨を承くるも、水は當に四坡に横溢すべきを疑ふなり。皆を決すれば、東海の濱一帶百里、水は南溟の風に入る。その間を斷ちて蛭よりも澹きもの一道走る。これ紫瀾の岸を打つて回る影なり。時は暮に近し。雲あり相逐うて上峯より落

人寰

ち、みな下界に堆屯して流れず。風の吹き抜くあれば、青絲を
穿ちたる銀鍼ありて之を縫ふ。青絲に似たるものはこれ田



子の浦に浮べる三
保の松原か。千松萬
松何ぞそれ縷の如
き。銀鍼に似たるも
のは富士川か。三十
六瀬何ぞそれ一芥
を浮ぶるに勝へざ
る。既にして山影み

な消ゆ。雲既に人寰を鎖せり。丘上の奇は將に是より始まら

んとす。

二三 富士の高嶺 (二)

忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり、一望平布の雲は争
ひ立ち羊角して丘に上る。これ風雨の人寰に満つるなり。雲
急に余を追ふ。余は遙方の石室を望みて走る。雨は逆上して
濺ぐこと亂雹の如し。草帽を飛ばされんとする事數次、身は
雲と相先後す。漠々たるもの既に行膝を没せり。超乗して走
りて纔に石室に至れば、雲は既に咫尺、余を石室のうちに窮
追して更に上峯に向つて走る。走るところ砂石みな活く。石
室の人晒つて迎へて曰く「これ過雨なり。頃刻にして霽れな

馱驢

ん」と言いまだ終らざるに黒風・白雨室に滿つ。膝を抱きて待つことしばらくにして石室の戸に微紅あり。走り出でて余を追ひし雲を望めば、既に上頭の寶永山に觸れて碎け、更に夕暉に照さるゝに遭ひ、雨は千顆萬顆の珠璣となり、紛紛として中天より落つ。手を舉げて之を受くれば光彩一瞬にして消え、ただ衣上新に亂暈の痕を添ふるあるのみ。

人寰のところを見れば正に黄昏。夕暉の前に雲あり、奇峯を成して争ひ起つ。みな日を銜めるがために紅く輝き、周圍に金精の色を放てり。朱馬の馱驢して炎の如き鬣を振ふが如きあり。金剛力士の金兜を戴き朱甲を撰して相觸れて立つが如きあり。處女が百寶の花鬘を被り、紅鳳の花鞍を穿ち、

霞衣を披きて舞ふが如きものあり。終に相盤旋して卻走す。既にして朱丸の如き夕暉急下すれば、奇峯漸次に没し、天地寥廓として皎然たる大月虚明に浮ぶ。

指を屈すれば、今宵はこれ陰曆六月十一日なり。余や金剛杖を横たへて看る事暫くにして、殆ど我あるを忘る。仰いで上峯を望めば雲あり、俯して下界を瞰れば雲あり、上下の雲間に唯鐵よりも黒き一大絶壁の斜に懸垂するあるのみ。四顧すれば縹緲蒼茫、身は天柱を攀ぢて紫微に入る想あり。この高遠の景に對しては、口言ふこと能はず、筆描くこと能はず。神澄み氣清く、愴然として涙の隕つるを知らず。

爛砂の上を度れる一路微白なるを踏み、磬折して登り、終

紫微

磬折

に行きて六合目の石室を得たり。石室の主人爐を擁して坐す。驚き起ちて迎へて曰く「暮夜獨往貴客の如きは稀なり」と。余や寒き事甚だしきを以て、直に主人の座を奪うて坐し、且飯を命ず。粗糲にして食ふべからず。枯魚一枚、豆腐汁一碗、また箸を下すに堪へず。蓋しこの地海を抜くこと七千尺、大氣の稀薄なるがため、火氣甚だ微弱にして、飯を炊げどもこれを熟せしむること能はず。糯を加へて纔に粘力を添ふと。饑うるを以て勉強して數椀を傾け、終に衾を擁して臥す。枕邊に鏘然たるものあり、琴筑を鳴らすが如し。屋上の雪の解けて、篋を傳ふ聲なり。これを久うして眠り得ず。首を上ぐれば、小燈焰なく、石室の中凄陰幽寂、屋外ただ風聲を聞くのみ。

人籟

靜かに起ちて扉を推せば、落月袖に在り。寒星人と親む。微茫のうち物あり、簇々として來りて石室を去ること數尺の處を過ぎる。白衣冠して白馬に騎するものあり、素車に乗るものあり、白幡を擎ぐるものあり。虚を度りて聲なく寂々として行く。岳上の鬼物、この夜闌け人籟絶ゆる時に當り、出て遊ぶなるなからんや。燈を執りて之を照せば、馬や幡や車や忽ち消え、青紗の如きもの袖邊を掠めて飛ぶ。一氣あり冰よりも冷やかに、來りて燈を吹き滅し、一團の白氣上峯に向つて去る。蓋し夜雲の行くなり。

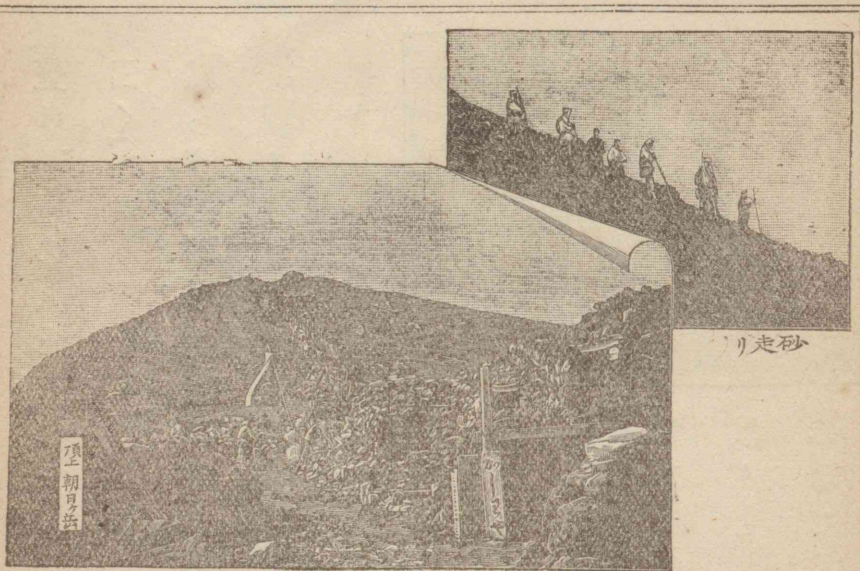
大靜大寂久しく立つべからず。終に扉を鎖して寢ぬ。輕寒蒲團に上りて眠熟しがたし。曉ならざるに短夢回り來れば、

主人は既に爐に踞して飯を炊ぐ。余や既に萬古の雪に嗽ぎて心下に一塵事なし。靜坐して以て日出を待つ。

既にして主人塵きて曰く「日將に出でんとす」と。起ちて屏邊の平石に踞して之を看る。はじめ東方昏黒の裡紫氣ありて搖曳し、漸く變じて微紅となる。余眸を凝らす。俄にして炬の如き者あり、色は渥丹の如し。或は昇り或は降る。たま〜彷彿として上峯に天鷄の聲を聞く。石室の人曰く「これ淺間神社の鐸聲なり」と。余屏息して立ち、石室の人跪きて摹拜す。須臾にして、溟中渾沌のところ依稀として五彩の龍文をなし、次第に鮮明を加へて光芒陸離、遂に混じて猩血の色をなす。うちに物ありて浮べり、雙黃の卵の如し。忽ち合して熔銅

渥丹

依稀

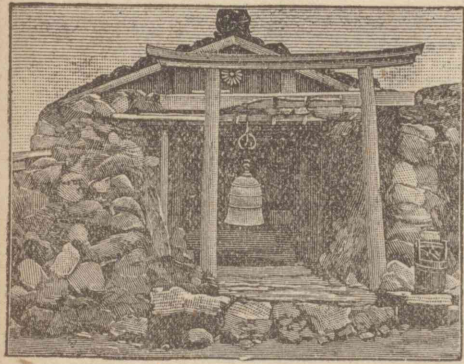


の色をなす。石室の人曰く「これ太陽なり」と。熔銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金を以てし、終に白熾鐵の色をなす。忽ち大鎚の一下に遭ふが如く、百千道の金箭直に天を射、溟中猩血の色逆だちて之を追ひ、太陽乃ち躍如として昇る。天地茲に清明なり。

余や此の宇宙の大觀を看るを得て、胸宇の海の如く濶きを

崢嶸

富士山絶頂
池間神社



覺ゆ。石室の人と共に食しをはりて結束して出づ。石室の人曰く、之より嶮なること甚だし、徐々として脚を攢めて登れ、然らば呼吸切迫して上峯に至る能はざらんとすと。謝して行く。仰ぎ見れば、崢嶸たる絶頂は四峯を成して高く天を衝き、無心の雲も亦怖ちて近づき飛ばず。下瞰すれば絶壁斜に起りて直に人寰に至り、一物の遮るるなし。爛砂漸く大に處々に山骨を露はす。その處ごとに雪あり。鞋痕この碎銀の如きものゝ上に狼藉たり。掬して之を食はんとし、驚歩して淨處に就く。萬年の雪の冷なること脾肝に透徹す。路は益、急な

り。磬折して登り纔に八合目の石室に至る。これより愈、險なり。鞋底幾たびか摩擦して終に襪に及ぶ。踞して鞋を易ふること兩三次、岳神の棲處は既に近し。奇巖處々に立つ。呵して立てる巨魔の如し。既にして九合目に至り、既にして絶頂に至る。(運塚麗水)

練習一、次の語句の意義を問ふ。

歸牛牟々落暉を帶ぶ 落月袖上にあり 寒星人と親しむ

天地寥廓として皎然たる大月虚明に浮ぶ。

二、獵々 珊々 漠々 を含める三つの短文を作れ。

三、戒、誠、箴、警 類、連、累 の區別を問ふ。

二四 報徳教

報徳教者、相州小田原人、二宮尊徳所首唱也。其説曰、父母根

推讓

元、在天地命令、身體根元、在父母生育、吾身富貴、在父母積善、子孫富貴、在吾身勤勞、身命長養、在衣食住、衣食住、在田畝山林、田畝山林、在人民勤耕、今年衣食、在昨年產業、來年衣食、在今年艱難、年年歲歲、不可忘報德、蓋其爲教、以誠心爲本、以勤勞爲主、以立分度爲體、以推讓爲用、受荒爲沃、受穢爲淨、受苦爲樂、受人之所惡、施己之所好、受借財爲償財、貸無利息之金、我無損失、而彼被大惠、乃修身齊家、生財富國之道也。
(中村正直)

二五 自治體の模範

自治體の改良發達に熱心なる自治協會は、其の筋より自治體の模範と認められたる町村の中、静岡縣稻取村の前村

開啓
拓披

長田村又吉、宮城縣生出村の村長長尾四郎右衛門、千葉縣源村の村長山本八三郎三氏を招待して、一昨日午後四時、歡迎會を華族會館に開きたり。これ實に近來の美舉なり。社員の一人は多大なる趣味を以て此の會に臨みたり。

華族會館樓上の廣間は人を以て満たされたり。北海道廳長官園田安賢、臺灣民政長官後藤新平兩氏が、日本の寒熱兩極端を代表して此の會に臨まれしは、頗る對照の妙を見る。其の他會する者七八十名、多くは當代知名の士なり。蒔繪の卓金塗の椅子、花絨緞、金縁の眼鏡、金鎖、金色燦爛光彩陸離たる廣間の中に、三村長及び稻取村小學校長太田米吉氏の控へたる有様は、數枝の野梅を折り來つて七寶の花瓶に投げ

劈頭

込みたるが如く、一種の詩趣其の間に横溢するを覺えたり。先づ残雪のまばらなる庭前において、樺色の夕日を浴びつゝ、一同撮影を終へ、再び廣間に復りて、同協會評議員の一人たる子爵加納久宜氏が挨拶の下に、歓迎會は開かれたり。評議員湯本武比古氏は先づ起つて、稻取村々長田村又吉氏を紹介せり。田村氏劈頭名乗り上げて、

『私は天保時代の生れて、無教育な山家育ちで御座います。今年は六十四になります』

温然

と、缺け落ちて疎になりたる齒の間より漏らしたり。視來れば温然玉の如き老翁にして、禿げ上りたる額に積徳の輝きあり、藹然たる眼に平和の源泉を貯ふ。質素なる紋附羽織に

田村翁肖像



赤縞の餘り新らしからぬ袴、六十年の労働に鍛へたる鋼鐵の腕を垂れ、松の瘤の如き雙手の指を組み合せ、

恥愧
羞

恐れず恥ぢず、さりとして誇らず、悠然として直立せり。

『萬物の生育は天地人三才の合體から成ります。われわれ百姓が米作を致しますのは、天と地との大きな働に聊か人間の力を加へるといふに止まります。さうして其の出來上つたものは、天と地と人と三つに分配するではなく、人間ばかりで收めるのでございます。どうも有り難い事

自治體の模範

てございます。ですから、人間は徳を積んで天地に御禮をしなければなりません』

言に一種の靈氣あり。金色燦爛たる人。有爵の人。有位の人。名士。學者皆頭を垂れて傾聽せり。二宮尊徳翁を今にして見る如しとは、記者のみの感想にあらざりけらし。

『農業を改良し、物産を發達させて、それで村が盛にならぬとは不思議です。なぜだらうと考へました。これは教育をもつて人間の心の物産を發達させることに氣がつかぬからです。さう思つて見ますと、どうも教育は學校の門から外へ出てゐない。生徒は學校語と家庭の語と他所行の語と三段に使ひ別けるのでございます。これではいけま

せん。農事と教育とは繩の様に撚り合せなければならぬものだと思へました』

此に至つて、老翁が灰色の面は熱心の潮に彩られ、其の眼は燃ゆるが如くなり來れり。

『他の事は存じませんが、私どものやうな百姓が、何か目に見える功績を擧げようと致しますには、どうしても十年か十五年はかゝります。私が心ある人だちと相談をしまして、農事と教育とを一筋の繩に撚り合せようと企てましたのは、抑も二十六年の一月でございます。今では世間から模範村などといはれるやうになりましたが、實際は一つとして人の模範になりさうな功績が擧つて居ませ

ん。お恥づかしいことでございます

といひつゝ、後の椅子に坐せる極めて質朴なる、多分此の老
村長の助役なるべしと思はるゝ風采の老爺を指し、

「此の人は私の村の校長でございます。教育を學校の門の
外へ出してくれたのは此の人の力でございます。二十六
年以來、青年會は勿論の事、母の會といふものが出来、未
婚婦人の處女會、天保時代に生れた私のやうな頑固な老
人を教育する目的で、老人會といふものも設けられまし
た」

「日清戦争の際第二の御勅語を拜讀しまして、これこそわ
れ〜に下された御言葉だ。われ〜は此の場合益、農業

の戦争を勵んで、軍人の戦争にまけないやうにしなければならんと、一村心を協せて鋤鋏の戦争を始めました。向
うの荒地を攻撃しては藪の根を絶やし、後の山を突崩し
ては勝鬨をあげるといふ始末。夜などは彼方にも此方に
も篝火が燃えて、眞の戦争にも劣りませんでした。さうし

て我が國が終

局の勝利を得

ました頃には、

稻取村も農業

の戦争に大勝

利を得て、七十

田村翁の筆蹟

福報をきかす

あうりやう

おのれ

田村又三

自治體の模範

町歩の新らしい田畑を開墾致しました」
 老翁は獨り積徳・平和の古君子たるのみならず、火の舌電の氣を有せる論壇の戰士なり。其の缺けたる齒の間より迸り出てし方言交りの言語には、一種不可思議の威力ありて人を壓倒するを覺えき。(萬朝報による)

練習一、次の語句を解釋せよ。

溫然玉の如き老翁

積徳平和の古君子

藹然たる眼に平和の源泉を貯ふ

火の舌電の氣を有せる論壇の戰士

二、揚擧、貯蓄、恥愧羞の區別を問ふ。

三、次の片假名を漢字に改めよ。

シャウダイ

カイコン

クワンダイ

サツエイ

二六 一生の覺悟

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、植物かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸植物と異ならんと欲せば、生れがひある人とならんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して舉國の悼惜を受くる人たらんことを望む。

人生れて呱呱の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營・自活して、世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一ならず。これを近くして先づ父母の洪恩あり。我等の生るゝや自營の道を知らず、自活の道を知らず、ただ泣くこと

呱呱の聲

忘—遺

を知り笑ふことを知るのみ。此の間晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が成長を遂げしむるものは我等の父母にあらずや。

これに次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我等に誨ふるに事理を以てし、我等に説くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは師長にあらずや。

更に又至尊及び國家に對する恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる御靈德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、其の福祉

塗炭の苦

酬—報

を増進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我等が父母、師長をして、我等に對する慈愛、薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。もし國家にして其の務をなさずんば、生民亂離塗炭の苦に陥りて、我等は遂に安全なる發育を遂ぐるに由なけん。我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實にこれら數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後において、これら數者に酬ゆるは人間當然の義務にあらずや。

然れども、人間の生涯は實に區々たり。或は其の修養の時期に當りて、懶惰・遊蕩の間に貴重の光陰を送り、體軀徒らに長じて、當に自營自活以て我が生育の恩に報ゆべき時に至

醉生夢死

るも、無爲・無能其の父母の恩に報ゆること能はず、師長の恩に酬ゆること能はざるものあり。況や國家が生を成す所以に對ふることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して睡る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

又其の無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に従ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送るものは、これを前の醉生夢死する者に比すれば勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは、僅かに自ら受くる恩に酬ゆるに過ぎずし

て、その一生の經營事業の永く後世に徳し、その流風・遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。

かくの如きは當に我等の理想とすべき所にあらず。我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、その畢生の事業は、以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實にこれに外ならず。

それ生きて一郷の爲に功あるものは、死して一郷の爲に惜まれ、一郡の爲に盡せるものは、一郡のために哀まる。若し

綽々

それその事業國家全體の進歩を助成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝものに至りては、その取る所の何の道たるを問はず、その人の存否は直接間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。これを以てその人一たび逝くや、國を舉げてこれを惜まざるはなし。嗚呼天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而して其の死の天下に知らるゝ者果して幾何かある。

少壯の諸子よ、諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も一生の覺悟は即ち今日より定めおかざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか、一郷一郡の爲に惜まるゝ人とならんとするか、抑亦舉國の悼惜を

遼遠

受くる士とならんと欲するか。

(加納治五郎 國士)

一、次の語句を解釋せよ。

兇惡を正し不逞を罰す

生民亂離塗炭の苦に陥る

餘裕綽々たるものあり

前途は遼遠なり

二、や か を用ひて疑問及び反語の文を作れ。

三、酬報 忘遺 の區別を問ふ。

實業
新日本讀本 卷七 終

大正三年十二月十六日印
大正三年十二月二十日發
行 刷



實業
新日本讀本

改正	一、二、三、四各金二十五錢
定價	五、六、七、八各金二十七錢
高級用	一、二各金二十七錢
大正六年	一、二、三、四各金貳拾七錢
年度定價	高級一、二、三各金貳拾九錢

著者 六盟館編輯所

發行者 東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資六盟館

右代表者 杉本七百丸

印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地
高橋 郁

發行所

關西大販賣所

東京市日本橋區
鐵砲町三番地
電話 國田 神田 二二六四番
振替口座東京 二二五〇番

合資六盟館

大阪市南區
心齋橋筋二丁目
電話 國南 九番
振替口座大阪 四三二番

和村文海堂

広島大学図書

2000054286

